

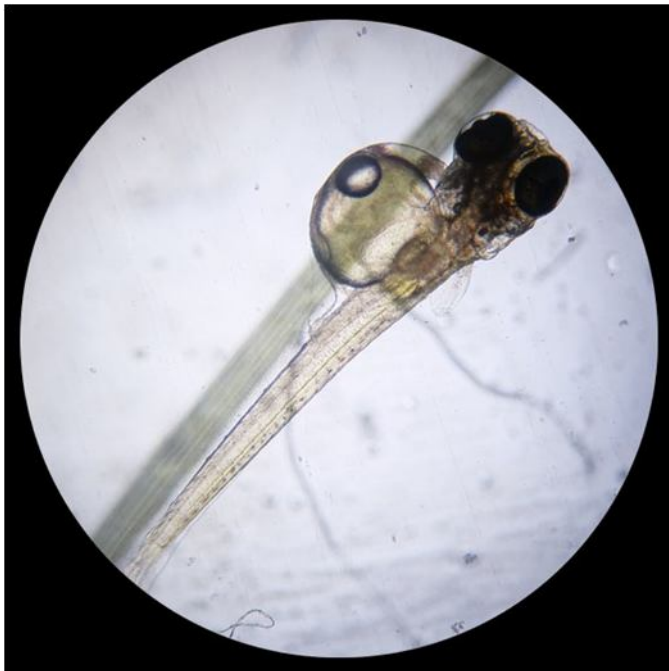
「稚魚の骨折」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

メダカの卵は管理が難しい。常温で置くと、あっという間に孵化してしまうので、冷蔵庫に入れて成長速度を調整する。冷蔵庫の中は摂氏5℃程度で、もともと冷たい川に住むメダカにとっては、特に支障はない。実は、これはあまりいい方法ではないと思う。しかし、どのクラスも平等に観察させるためには、やむを得ないことだろう。



卵の観察が終わって、一人1個ずつ卵を配布したあとは、水槽を常温に置いた。ものの数日で、ほぼ100%孵化して、文字通り「メダカの学校」になった。



孵化したばかりのメダカも、非常に魅力的な観察対象である。まだ卵黄がついていて、その中に血管が見

える。すべてがスケルトンなので、心臓の拍動や赤血球の動きもよくわかる。



子どもたちは、1時間でも2時間でも実に夢中になって観察する。メダカの稚魚は、専用のスポイトで吸い取って、ホールスライドグラスに置いて、顕微鏡観察するのだが、どんなに注意していても、必ず事故が起きる。一番多いのが、稚魚の骨折だ。スポイトの先端が直接稚魚に触れた時に発生する。



「骨折」といってもほぼ全例が「脊椎骨折」で重傷である。残念ながら、こうなると数分の命である。私は、この状態になった稚魚も、積極的に観察させる。「命の始まり」だけではなく、「命が尽きる」という一瞬に向き合わせるためだ。子どもによっては、涙を流しながら観察していた。